

余 彬 (シュ ヒン)

中国出身／2006～2007 年度奨学生

東京外国語大学 地域文化研究科 修士課程修了

中国へ帰国後、日本学術振興会北京研究連絡センターに就職され、
学術分野での両国の架け橋として活躍されている余彬さんにご寄稿いただきました。

お正月、日本人の元同僚が「丑年」の飾りを、わざわざ日本から郵送してくださいました。2020 年は大変な一年でしたが、暦が変わって、2021 年は健やかで実り豊かな一年となるように、とのお手紙も添えられています。国境を越えた温かい友情に包まれて感動しました。日本に留学していたときは、日本人の方たちは優しく接して下さって、どんな時代でも、どんな時でも、人々は平穏な暮らしを願い、喜びや悲しみを分かち合い、心が通じ合えるということを教えてくれました。中国に帰国した後も、仕事を通じて様々な場面で人と人の繋がり大切さを実感しています。私は2008 年に帰国し、厳しい就職活動の末に日本学術振興会北京研究連絡センター（以下「北京センター」）に就職することができ、今日に至っています。日本学術振興会は、日本を代表する研究助成機関として、学術研究の助成、研究者の養成、国際学術交流の促進など、学術振興に不可欠な諸事業を積極的に実施しています。世界9か国10か所にある海外研究連絡センターの中でも最も若く、2007 年に設立された北京センターは日本人駐在員4 名、現地職員2 名の小さな事務所ですが、笑顔の絶えない職場であり、私を成長させてくれる職場でもあります。

北京センターのイベントは、日中両国の政治情勢によって中止を余儀なくされる事態もありましたし、日中の仕事の進め方の違いにより何回も調整しなければならないこともあります。しかし、個人の力の及ばない領域のことで煩わされることよりも、むしろ、長年、日中両

国の研究者の学術交流によって育まれてきたかけがえのない信頼関係に支えられた人々の純粋な心を信じて自分の持ち場を全うすること、それが北京センター職員の共通認識です。

私は修士課程の2 年間、坂口財団にお世話になりました。財団からの多大なご支援のおかげで、生活費に困ることなく学業に専念できました。2 年間の間に、合宿、歌舞伎鑑賞、コンサート鑑賞、記念館見学など、財団が日本文化に触れ合う機会をたくさん与えてくださいました。帰国した後、財団に近況報告をしましたが、日本から遥々ニューズレターを郵送して下さるとは思いませんでした。ニューズレターの入った封筒が最初に届いたときにびっくりしましたが、嬉しかったです。それ以降、紙媒体の印刷費とエアメールの郵送費といったコストもかかる中で、財団が定期的にニューズレターを郵送して下さって、この13年近くの間一度も中断することはありませんでした。私と財団との連絡が取れているというより、財団が私に連絡を取り続けてくださっているのです。

去年から私が電子版の送付をお願いしたところ、電子版と共に届いたのが代表理事の蜂谷さんや事務局からの温かいメッセージでした。人的ネットワークの構築というものは容易なことではありません。それを維持するのがどれだけ難しいことかは、私も似たような仕事をしているのでとても良く分かります。一時的な経済支援だけではなく、このように奨学生や同窓生との長期的な心の交流を保つように力を注

いでいる財団の理念とビジョンに深く共感しています。こんなに素敵な財団に選んでいただいたことは、私にとってかけがえのない財産です。

多様な価値観を受け入れる姿勢が大切です、と良く唱えられています。しかし、姿勢だけでは物事が進みません。どうしても受け入れ難いことがあるからです。私たちは誰もが生まれ育った環境によって制限されています。外国人はさておき、自国の人同士でも合わないことがよくあります。だからといって、万事休すというわけではありません。異文化への知的関心や異なる価値観への尊重を常に意識し、実務で解決能力とコミュニケーション能力を鍛えていくことが重要です。関心があれば、好き嫌いを越えて、より深く掘り下げて考察し、視野を広めることが出来ます。尊重すれば、互いの違いを認め合い、より多くの共通点を見出すことが出来ます。

私が知り合った中国人研究者の中で、日本を代表する大文豪である川端康成、大江健三郎などの作品を学術的に研究する研究者もいる一方で、「村上春樹が今年こそノーベル文学賞を受賞するか」は一般人の間でも毎年話題になります。他にも、たくさんの日本の歴史書や、古典文学、近現代文学の作品が中国で出版されています。原作が最高であることはもちろんのことですが、翻訳本は単に日本語を中国語に置き換えられるのではなく、一つの文学作品として昇華されています。美しい日本語が美しい中国語になるのは、その訳者たちがいかに日本を、そして日本文化を愛しているかが作品を通して読者によく伝わってきます。日本の優秀な映画作品やドラマなどが中国で上映され、舞台劇や映画としてリメイクされることもあります。文化や国境を越えて人々の心を揺り動かすものは、昔も今も変わっていません。

中国の伝統的な暦では、2月12日から「丑年」になります。春節を迎えるにあたり、五穀

豊穰の一年となることを祈念し、ゆっくりと歩きながら着実に前へ進む生命力の高い牛のように、私たちはきっと困難に乗り越えて、穏やかな日常を取り戻すことができると信じています。



▲日本人の元同僚から郵送された丑年の飾り

以上